

南極OB会 会報

No. 35

発行

南極 OB 会

編集

会長 国分 征

広報委員会

今号の主な内容

- 第 59 次越冬隊からのミッドウィンター祭メッセージ
- 2018 年度南極 OB 会総会・ミッドウィンター祭
- 第 25 回・第 26 回「南極の歴史」講話会
- 話題：松本利松さん(1 次夏、テキサス大学名誉教授)との出会い、
「宗谷」七人衆、氷床コア見学、南極倶楽部「山の会」筑波山紀行、
南極 OB 会アマチュア無線クラブ ハムフェア 2018 に参加
- 南極関連情報 ○隊次報告 (10 次、28 次、29 次、38 次) ○新刊紹介
- 会員の広場 (南極 OB 会オリジナルカレンダー2019 年版、昭和基地からの写真 他)



国分会長はじめ南極 OB 会のみなさま

この度はミッドウィンター祭の開催、おめでとうございます。

また昭和基地でのミッドウィンター祭にあたり、国分会長はじめ南極 OB 会御一同様よりお祝いの連絡を頂き、大変有り難うございました。

おかげをもちまして、我々 59 次越冬隊 32 名は全員元気で過ごしております。

早いもので南極昭和基地では今月から極夜期に入り、外作業もほとんど出来なくなっ

てきましたが、隊員一同、ミッドウィンター祭（MWF）に向けての準備に余念がありません。今年の昭和基地での MWF は 6 月 21 日～24 日と遅れての開催となりますが、越冬後半の多忙極まる作業・観測に向けて、しっかり鋭気を養うとともに隊員間の絆がさらに深まっていくことと思っております。

59 次隊では積雪量が例年に比べて少なく、基地ではまだ地面が見えているところも散見します。また、ここ数年来続く海水状況の不安定さも今後の野外活動の懸念にもなっております。このような様子についてはいくつか写真をお送りいたしますので、ご覧頂ければと思います。

国内ミッドウィンター祭の御盛会、そしてみなさまの益々の御健勝を遙かなる地にて祈念いたしております。

引き続き皆様方のご支援、ご協力を賜れば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

平成 30 年 6 月



第 59 次南極地域観測隊

越冬隊長 木津暢彦 隊員一同

2018 年度南極 OB 会総会報告

2018 年 6 月 16 日（土）、南極 OB 会総会が法政大学富士見ゲート棟 G403 教室において開催された。これまで日本大学や明治大学で開催してきたが、それぞれの大学に所属していた南極 OB の協力があって実現したことである。開会にあたって、南極 OB 会国分 征会長より挨拶があった。総会は 2007 年に第 1 回が開催されて以来、今年度で 12 回目を数える。その間、南極 OB 会の支部組織も充実して、現在は 18 支部になって全国で活動していると報告された。

続いて、南極 OB 会会則第 11 条に従って、出席会員の中から議長に柴田鉄治氏（報道、7 次、47 次同行者）を選出し、議事進行に入った。

① 活動報告



総会冒頭で挨拶する国分征会長

神田運営委員長より 1 年間の運営委員会の組織、役割、活動の概要について報告があった。続いて、福谷広報委員より会報第 32～34 号及び資料編の発行、ホームページ更新などについて報告があった。里見南極教室委員長より年 3 回の南極教室を開催し、講演の際に使用した南極の氷や展示物に子供たちは興味を持って学んでいたことが報告された。野元堀アーカイブ委員長よりアーカイブ資料受入の流れ、受入状況の報告があった。渡辺委員

より、年 3 回の「南極の歴史」講話会では南極観測 60 周年の歴史をテーマにして、観測、越冬生活に焦点を合わせて企画したことが報告された。他に運営委員長より「宗谷」、「しらせ」のボランティア活動の紹介があった。これをもって報告事項を終了した。

② 審議事項



柴田議長の進行の下、活動報告をする神田運営委員長

田中会計担当委員より 2017 年度収支決算案が報告され、続いて大久保嘉明監事により会計監査結果が報告された。審議の結果、収支決算案が承認された。

南極OB会 2017年度収支決算(案)
2018年3月31日 (単位:千円)

収 入			支 出		
前年度繰越金	予算	決算	前年度繰越金	予算	決算
2016年度通信費	2,850 (950人見込)	2,840 (892人)	会報発行関係費用	1,200	1,272
			事務室運営費 手数料(通信費除却) 送金手数料	1,400	2,089 (86) (5)
			交通費(運営委員会等)	220	245
総会・壮行会	500	461	総会・壮行会	500	495
			慶弔関係費用	30	-
			次年度繰越		170
小 計	3,350	4,271	小 計	3,350	4,271

この決算報告の承認を受けて、運営委員長より 2018 度の活動計画案が提案された。審議の結果、活動計画案が承認された。

会 計 監 査 報 告

南極OB会会則第8条により、2017年度会計(2017年4月1日～2018年3月31日)について、2018年6月8日に監査を実施した。

金銭出納簿及び関係書類、預金口座通帳、振替口座管理状況等について点検した結果、すべて正確に管理されていることを確認したので報告します。

2018年6月8日

南極OB会

監 事 大久保 嘉明



会計担当委員より 2018 年度収支計画案の報告があった。審議の結果、収支計画案が承認された。これをもって審議事項を終了した。

南極OB会

2018年度収支計画(案)

2018年6月16日

(単位:千円)

収 入		支 出	
前年度繰越金	170		
2016年度通信費	2,850 (950人)	会報発行関係費用	1,200
		事務室運営費	1,400
		交通費	220
総会・壮行会	500	総会・壮行会	500
		慶弔費	30
		次年度繰越金	170
計	3,520	計	3,520

③ 南極観測 60 周年記念継続事業報告

神田運営委員長より、2017 年に「南極大陸大紀行」が発行されたことと、2013 年に発行された「南極読本」の改訂版が現在、編集中であることが報告された。

④ 支部組織の編成

山岸支部担当委員より、本年度になって支部の編成が見直され、阪奈和支部、兵庫支部、岡山支部。高知支部が設立された。現在までに南極 OB 会は 18 支部になったことが報告された。

⑤ 一般社団法人南極 OB 会関連

一般社団法人の代表理事 国分 征氏により報告があった。任意団体の南極 OB 会は通信費により活動を行っているが、記念品の販売などは法人の活動である。法人はまだ立ち上がって間もないので、十分な活動計画は出来ていないが、今後、この総会で法人の詳細な活動と会計についても報告していきたい。

以上、柴田議長の議事進行により、活動報告、審議事項の全ての議事を終え、総会は閉会となった。

(神田啓史)

2018 年ミッドウィンター祭

2018 年 6 月 16 日、ミッドウィンター祭が法政大学ボアソナード・タワー25 階において、午後 5 時より開催された。都内を一望できる素晴らしい会場であった。福谷 博氏(第 9 次)の司会進行で懇親会が始まった。昭和基地のミッドウィンター祭は 6 月 21 日から始まるようで、東京会場は一足早く始まった。第 59 次隊の木津暢彦越冬隊長はお祝いに、完成した基本観測棟の上空を乱舞するオーロラの見事な写真(p.20 参照)と A 級ブリザードの昭和基地の写真を送ってくれた。この写真を大

きく引き伸ばして会場の壁に貼った。最初に国分会長(第 7 次)の挨拶に続いて、乾杯の音頭により歓談に入った。続いて、会場からは次々とお祝いの挨拶が出て、和気藹々の雰囲気となった。

会が盛り上がるとこれまでにあまり出なかった「南極の歌」の合唱やハーモニカ演奏まで登場した。越冬隊からのお祝いのメッセージが読み上げられ、会は和やかなうちに閉会となった。

(神田啓史)



ミッドウインター祭参加者の皆さん

第 25 回「南極の歴史」講話会の概要

(2018 年 3 月 31 日 (土) 14:00~16:00 日本大学理工学部 1 号館 133 教室)

第 25 回「南極の歴史」講話会は、『越冬生活からみた南極観測隊 60 年の歴史』をテーマに、演題Ⅰ「「宗谷」の時代、3 次隊の越冬生活」、講師中村純二(1 次夏,2 次夏,3 次冬)、演題Ⅱ「15 次隊、通信隊員の越冬生活」、講

師五十嵐正文(15 次冬)の 2 つの話題で開催された。紙面の都合上、演題Ⅱについては第 34 号に紹介済みで、今号は演題Ⅰの概要を紹介する。

「「宗谷」の時代、3 次隊の越冬生活」

1 次、2 次のエピソードや、3 次隊の越冬生活などについて

中村 純二 (1 次夏、2 次夏、3 次冬)

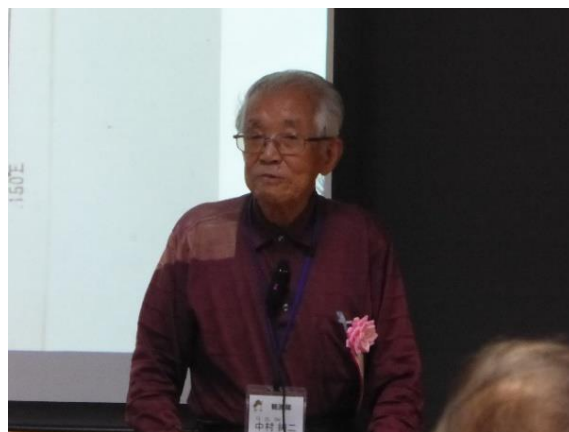
日本隊が初めて国際的な観測に協力するという話を聞き、極光、夜光を観測するという事で、予備観測である第 1 次隊から参加した。

1958 年の IGY (国際地球観測年) の年に、観測機器(全天カメラ、光電受光器、分光器)を整備して、本観測(第 2 次観測隊)をするはずだったが、氷の状況が悪く、昭和基地への物資輸送ができずに 2 次は中止となった。

越冬隊の成立

極地で生活するには、水を作るにも、雪上車や、暖房にも燃料が必要になるので、燃料の量が、越冬できる人数を制限した。さらに、3 次隊では海氷上に一時保管した予備燃料が海に流出してしまい、もし、4 次隊が予定通

り迎えに来ないと命がない、というギリギリの状態、越冬が始まった。



講演する中村純二氏

内地との通信

当時は、電波による通信だったので、美しいオーロラを観測することができる磁気嵐の時など、通信が一週間程できないこともあった。それでも3、4か月に一回くらい放送の順番が回ってきて、雑音交じりでも、家族の弾くピアノの音を聞くことができ、逆に音声で南極の生活状況を家族に伝えられ、とても楽しみでありがたかった。

オーロラ観測

オーロラの観測は、全天カメラと、光電受光器、分光器の計器を用いて行った。

これらの計器は、観測棟の屋根の上にドームなどを設けて、オーロラの形を写真に撮り、オーロラの強度と、スペクトルを観測した。第3次で私が越冬したときは、ちょうど、太陽活動が最盛期の年で、また、昭和基地は、オーロラ帯の真下にあったので、越冬中に、あらゆる種類のオーロラが現れ、見事だった。晴れていれば、ほぼ毎晩オーロラが現れ、磁気嵐の時には、全天が真っ赤になるようなオーロラが現れた。



観測棟外観。左端全天カメラ等【1次隊の際は、光電受光器（中）、分光器（右）は、屋上のレンズのみで内部機械は3次隊から設置】

オーロラ観測隊員は、昼夜が逆転

オーロラ観測のために、夜中起きている必要があった。起きると、夕食時のメニューが重く、観測が終わると、朝食用の、沢庵と味噌汁だけの食事をして寝ることになり少し物足りなかった。昼夜逆転でも、他の隊員との仲はよく、孤独ということにはなかった。日記や手紙を書き、フルートを演奏するのも楽しみだった。

大変と言えば、歯医者がいなくて、隊員同志で、悪い歯を抜きあったりしたこともあった。



3次隊冬のリュツォ・ホルム探検
(岩壁の上に立つ中村純二、撮影平山隊員)

タロ・ジロの生きた知恵

タロとジロの後をついていったら昭和基地の裏山を越えた土手に、エサにやったアザラシ（南極条約1961年6月の発効より前のため）を一部埋めていた。その付近を掘り返してみると、凍ったアザラシの糞がいくつも出てきた。2次隊で生き延びたのは、アザラシの糞を食べていたためのものである。



犬ぞり探検（改良した犬ぞり。平山隊員とタロ、ジロ、アク、トチ。撮影中村純二）

犬ぞり探検、リュツォ・ホルム氷河調査

せっかく南極まできたので、やりたいことをしようと、犬ぞりで旅行もした。

思い出深いのは、日本大学の平山君と二人で、リュツォ・ホルム湾奥のリュツォ・ホル

ム氷河まで往復 20 日間の犬ぞり探検をしたこと。タロ、ジロ、アク、トチが、氷河までひいてくれた。150m の高い崖に登ったり、クレバスの氷河の氷がミシミシと、音をたてたりする状況など、常に危険は伴ったが、犬たちと一緒に旅は楽しかった。

氷河末端に入ってから、犬も疲れるので

綱から外して、一緒に歩いて源流まで出た。氷河の奥は、上流は幅 1 km あるが、扇状に広がり、クレバスも見当たらないとわかった。この探検以降はリュツォ・ホルム氷河を超えたところに前進基地を作ることができ、その後の大陸探索の原点を見定める踏査ができた。

第 26 回「南極の歴史」講話会の概要

(2018 年 6 月 16 日 (土) 14:30~15:50 法政大学市ヶ谷(富士見ゲート棟 G403 教室)

第 26 回「南極の歴史」講話会は、演題 I 「医師からみた越冬生活 (極点旅行 50 周年に因んで)」、講師大久保嘉明 (9 次冬)、演題

II 「機械屋からみた越冬生活」、講師志賀重男 (14 次冬,17 次冬,24 次冬,27 次夏) の 2 つの話題で開催された。概要を紹介する。

「医師からみた越冬生活 (極点旅行 50 周年に因んで)」

大久保 嘉明 (9 次冬)

第 9 次隊は昭和 42 年 (1967 年) 11 月 25 日、自衛艦「ふじ 5001」で晴海埠頭を出港しました。空路で出発する現在と違って、当時は越冬隊も最初から船旅でした。

「医師からみた」とのタイトルですが、庶務係も仰せつかって色んな所に首を突っ込んでいましたので、以下箇条書きで概略を述べさせていただきます。

① 隊員構成

故村山雅美隊長 (2006 年 88 歳で逝去。今年生誕 100 周年) 以下報道を含め 45 名。夏隊 12 名。越冬隊は 28 名と報道 1 名。極点旅行隊員は隊長以下 12 名。医療担当は極点旅行に随行する小林昭男ドクターと基地を預かる大久保の 2 名に。

② 観測隊初の南極海潜水調査

1968 年 2 月 2 日、ラングホブデ沿海で福井義夫 (生物) と大久保 (医学) がウェットスーツで潜水。素潜り 12 分、スキューバダイビングは 4 回で 37 分。気温 (0.2℃)、水面温 (0.1℃)、水面下 7m (-0.7℃)。ウェットスーツでは直接氷点下の海水に接する顔面が冷たさを通り越して感覚麻痺になった。今後ドライスーツか、皮膚が鍛えられた越冬後の潜水が理想的と思われた。



講演する大久保 嘉明氏

③ 福島隊員の遺体発見

1968 年 2 月 9 日、西オングル島に地質調査に出かけた矢内隊員が、7 年前の第 4 次越冬時のブリザード中に遭難した福島紳隊員の遺体を発見。4 次隊でも隊長だった鳥居第 8 次隊長「我々と一緒に帰りたいかったんだなあ」

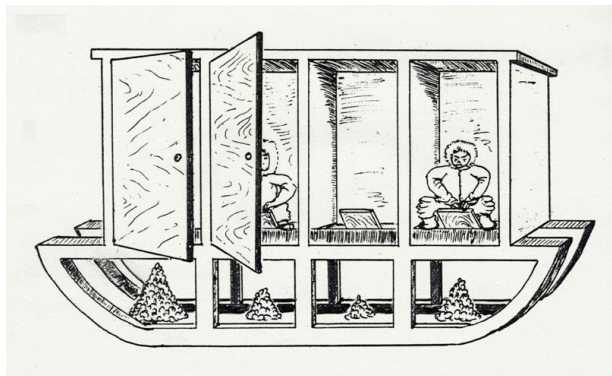
④ 第 9 発電棟 :

3 月までかかった建築で、研究観測隊員に負担も。65kVA 発電室や医務室、暗室、食糧倉庫として使われた。断熱材として天井裏に吹き込んだアスベストは「吸入すると肺がん (中皮腫) になる発がん物質」と後に判明した。

⑤ Q棟の「手術台兼ビリヤード」と「バー ナイン」

隊員憩いの場に。アルコールは掛け売りでWのトリス（10円）、角（40円）、スコッチ（80円）等で帰国後清算。

⑥ 櫓トイレ



櫓トイレの外観と使用状況

第7発電棟に航空機並みの水洗トイレがあったが、海氷上の櫓に設置されたトイレも利用した。ピラミッド型の糞塊から見たトイレ使用状況（図）は、ドアのある左端ブースが1位で、ドアのない右端が2位、ドアのある中央が3位、ドアのない中央が4位と、巷のトイレ使用状況と同じ心理状態がうかがえた。たまたま痔疾が原因とみられる鮮血便があったが、治療の申し出はなかった。

⑦ 寿司大会

隊長が大好きで事ある毎に開催。あらゆる場面でこじつけの「くさり寿司」「ゆすり寿司」「日の出寿司」「発寿司」「さらば寿司」等々。

⑧ 極点旅行中遠藤八十一隊員重傷

出発1週間目の1968年10月3日、アイスオーガーにミトンの紐が絡まって左腕を巻き込まれ、左上腕骨・尺骨・橈骨・第1中手骨骨折、左前腕外傷の重傷で基地送還。2 直角良性肢位でギプス固定（写真）、11月30日ギ

プス「外し」。治療中はストレス解消の意味もあって禁酒にしなかった。また治療過程に見られる筈の骨折部位の仮骨形成がなく心配したが、結果は理想的な骨折治療。



遠藤隊員とギプス固定状況

⑨ 極点旅行隊の歌

西部暢一通信隊員作詞で、1～12 番まであり、水戸黄門の節で。

⑩ 極点旅行隊

12月19日南極点到達。12月25日極点を出発。1969年1月24日帰路の最高点F556地点・3717mを「富士峠」と命名。2月9日、F16 まであと300km 地点で坂田文部大臣より「カウミヨウノキノボリトイヒシオノコ・・・」と「くれぐれも油断召されるな」の来電。2月15日F16 帰着。全行程141日間、5182km。・・・南極観測事業の遠征・探検（Expedition）の時代は終わった・・・。

⑪ 医療関連

骨折1件以外は全て軽症。腰痛症14件、挫創（開口傷）17件、挫傷（傷口なし）・上気道炎が24件、最多は凍傷で秋旅行13件、極点旅行12件、他2件、合計27件。

⑫ 2018年2月「JARE9・50周年記念誌」上梓

本講演の内容を網羅。

「機械屋からみた越冬生活」

志賀 重男（14次冬、17次冬、24次冬、27次夏）

はじめに（むかしむかし）

越冬生活するには、機械が4人、調理2人、医者2人、庶務2人で、30人越冬隊員に対し10人の設営隊員が担当します。

宗谷時代は、まだ南極探検隊の要素が強く、「ふじ」から本格的な日本南極観測隊になり、越冬して無事に帰国するだけではなく、観測隊は観測して帰国する必要があります。

我ら、設営は無事に帰国するのみです。

大型雪上車の経過

戦後 10 年（昭和 30 年）、東京オリンピック、東京タワー、首都高速の建築、南極観測隊もこの時期に決まり、「宗谷」の改造、犬ぞり、雪上車の製作が始まってからは、1 次隊から小型雪上車（KC20）の稼働、またコマツから隊員も派遣しました。

昭和基地から出る調査旅行はタロ、ジロたちの犬ぞりを使いました。

小型雪上車は、「宗谷」から昭和基地の機材を運ぶ輸送機械でした。

タロ、ジロたちを置き去りにしたとの報道で、二度と犬ぞりはやめました。

昔は、探検隊、民間企業の協力として、コマツの小型雪上車（KC20）を使いましたが、その後、小型雪上車（KC20）で調査旅行をしました。

砕氷艦

「宗谷」から砕氷艦「ふじ」に代わり、大量の機材、資材の輸送ができたので、昭和基地造成工事、道路工事用としてコマツの D50 ブルドーザを導入しました。

小型雪上車（KC20）では長期間の調査旅行ができないので、大型雪上車（KD60）試作車を作り、KD601、602、603、3 台を 7、8 次隊に搬入しました。



KD605 2014 年 KD604 とともに機械遺産として登録されている。秋田県にかほ市の白瀬南極探検隊記念館で保存し一般公開している。

9 次隊では極点旅行に KD604、605、606、3 台で 6000km を走行しました。

KD604 を持ち帰り、分解点検測定調査した後、今は、極地研に展示しています。

10 次隊で KD607、608、2 台をやまと調査隊に使用しました。

13 次隊で KD609、昭和基地に接岸できず



講演する志賀重男氏

持ち帰り、14 次隊でも KD609 を持ち帰り、やまと調査隊に KD609 が使用できませんでしたが、昭和基地の小島に上陸、冬に昭和基地に海上輸送しました。KD609 が 14 次隊のやまと調査隊に使えないので、KD605 をオーバーホールして使用しました。

14 次隊は大型雪上車の分解、部品交換作業（オーバーホール）、車体（フレーム）と外装以外の部品交換作業でした。

昭和基地の作業棟でオーバーホールが出来る設備はありませんでした。

はじめは、作業棟の整備、特に、吊り上げる設備（クレーン）がなく、2 トンの吊り上げるクレーンをボルトで取り付けました。天井の梁に穴をあける作業が大変でした。4m の足場を組み、その上で行いました。その上、電気ドリルが切れないので大変でした。

南極の冬（暗夜）の 6 月～8 月に分解作業でした。作業棟の室内の気温が -5°C ～ -10°C でした。

ブリザード

視程 100m 未満、風速 30m/s 以上で外出禁止、機械隊員は 4 人いますが、基地内のメンテナンスもあり、人手不足ですので、やまと調査隊員の応援により、交代で作業棟にて分解作業、組立作業を行いました。作業服がまっ黒になり、寒い中の作業でしたが、応援の人たちは、文句も言わずに手伝ってくれました。有難うございました。自分たちが分解作業、組立作業をして、その大型雪上車に乗り、やまと調査旅行に行くので、やまと調査中のメンテナンス（エンジンオイル交換、給脂）作業も手伝ってくれました。自分が分解、組立した所の点検もしました。5 か月間のやまと調査隊も無事に昭和基地に戻りました。昭和基地の風呂、新鮮なリンゴ、オレンジ、ビールを今でも思い出します。

その後、17 次隊に参加、コマツのラジコン

ブルを導入しました。

みずほ基地

長期間の滞在のために設備改造しました。みずほ基地の雪上車の駐車、外気温がマイナス 50 度になったら、雪上車のエンジンオイルを抜いて保管、(緊急車両) とした。

エンジン始動時、エンジンオイルを 70 度に温めて、エンジンに注入 (オイル、マイナス 30 度まで下がってもエンジンが始動) します。

24 次隊

行きは砕氷艦「ふじ」、帰りは砕氷艦「しらせ」、同次隊で、「ふじ」、「しらせ」に乗船してきた思い出があります。みずほ基地での滞在、セルロンダーネ調査旅行、2 機の飛行機による調査、帰りにあすか基地の候補地調査旅行、越冬中、設営隊員が昭和基地に全員ほとんどいなかった。設営隊員、知らない事も知ったふりして、何でも直さないと、信用がなくなるので大変でした (若いころの経験を生かす事)。

話 題

松本利松さん(1 次夏、テキサス大学名誉教授)との出会い

1. 出会いのきっかけ

私が勤めている財団は、株式会社ウェザーニューズの創業者が「気象リテラシーの向上」を目的として立ち上げたもので、気象等に関わる研究助成や先代南極観測船しらせ「現名称 SHIRASE」の管理運営を行っています。このうち、研究助成では、高校・高専の学生を対象とした気象観測機器コンテストというものを行っていて、アイデアあふれる気象観測機器を制作してもらい、その技量を競う取り組みが好評を得ています。

このコンテストは先代南極観測船しらせ「SHIRASE」で開催され、今年で 6 回目を数えていて、多くの高校・高専が毎年エントリーし、回を重ねるごとに認知度は高まっています。このコンテストで評価された作品には様々な賞が付与され、大学の研究室見学やアメリカへの研修旅行などがあります。アメリカの研修旅行では、気象関連の研究機

27 次隊

夏隊に参加、あすか基地の機材の輸送にコマツのブル D30PL、3 台、空輪分解組立、100km 輸送、12 時間の走行、あすか基地の発電棟の組立をしました。28 次隊から 5 年間、あすか基地では越冬観測が行われました。



大陸を走るブルドーザの解説を行う志賀氏

まとめ

南極観測隊に 4 回参加して、色々な経験をしました。今でも観測隊の仕事、越冬生活、隊員の名前、顔は忘れません、時々夢を見ます。普段の生活では、10 年前、20 年前の記憶が思い出せませんが、南極の仕事、生活の思い出は、一生忘れられないと思います。

関が集結するオクラホマ大学のレーダー研究施設や NOAA の施設を見学、ジョンソン宇宙センターの訪問などが有ります。この旅行の一部を現地のツアー会社に協力して頂いているのですが、この会社のオーナーが日本の南極観測隊に参加したことが有るという話を知



宗谷の航海記や資料を持参し、当時の思い出を昨日のことにように語る松本氏

りました。私は3年前に研修旅行に調整役として参加し、渡米したところ、オーナーが第1次隊の松本利松さんであるということがわかり、お会いしたのが出会いのきっかけでした。

2. 松本さんにとっての南極と米国生活

松本さんは東京大学を1949年に卒業され、地震研究所に勤められていた時に当時の指導教官であった萩原尊礼先生よりテンポラリーリリーフとして第1次隊へ参加しないかとの打診を受けました。参加に際し、家族の同意を得ることに大変苦労したとのこと。松本さんの任務は南極での地震計設置だったのですが、ほとんどが設営の仕事にかられ、自分の仕事が出来たのは2日程度だったとのこと。地震計の設置後に人工地震波の測定を行った際は、当時の宗谷の乗員からは船に当たる衝撃波の影響を心配されたそうです。この他にも大きく動揺する宗谷での生活の話や雪上車の運転について、設営作業の話などをされていました。

なかでも一番印象だったのは“猫のたけし”の話です。松本さんが南極に出掛けたのは20代だったため、多くの諸先輩から色々と激励を受けたそうです。そんな時に心の支えとなったのが“猫のたけし”で、苦労をされた時は猫のたけしが良きはけ口であり、良きパートナーだったとのことでした。ここで“猫のたけし”の名前の由来が何となく分かったような気がしました。

南極からの帰国後、刑務所からの依頼で南極講演をするために慰問されたりしたそうですが、3か月たって渡米し地震の研究を行わないかとの話が舞い込み、コロンビア大学に研究員として着任。その後、コロンビア大学の上司と共にテキサス大学へ異動されました。テキサス大学勤務時はアポロ計画に参画し、

月の地震波測定に関する研究やカリフォルニア周辺の地震に関する研究を行い、全米での地震研究に大きく貢献されました。また、米国内で大地震が生じた際はメディアに呼び出され、解説も良くされたとのこと。す。

テキサス大学退職後は奥様が立ち上げた旅行会社のオーナーとして、日本からの渡航者のフォローや米国企業との間の橋渡し役や日本企業の誘致などの活動に関わり、グレーター・ヒューストン日本人会の初代会長としての大役を担われています。また勲四等瑞宝章を授与され、日本からも生涯の功績を高く評価されました。

3. おわりに

今回の研修旅行には「佐々木嘉和賞オクラホマ研修旅行」という名前が付いています。佐々木嘉和さん(オクラホマ大学名誉教授、勲四等瑞宝章)は松本利松さんと東大時代の同級生で学生時代からの友人であり、卒業後は米国オクラホマ大学に勤務し、同大学の気象講座を立ち上げ、竜巻発生メカニズムに関する研究にご尽力されました。また、ウェザーニューズの企業運営にも深く関わってきた方です。佐々木嘉和さん、松本利松さん、南極のつながりで実現した今回の訪問ですが、今回の研修旅行に参加された学生は60年前の出来事や当時のハングリー精神を少しでも汲み取ることが出来たのではないかと思います。

松本利松さんは92歳にもなられ若い頃の話をととても懐かしそう感じます。これからも機会があれば出向き、南極の話や当時の資料を持参し、彼を元気づけていきたいと思っています。

三枝 茂((一財)WNI 気象文化創造センター
事務局長 37次夏オブ)

「宗谷」七人衆、氷床コア見学

「宗谷」が晴海を出港してから60周年を迎える2016年の10月6日、「宗谷」の七人衆が極地研究所の低温室を見学した。事前に「宗谷」の航海科を務めた高尾一三さん(1~3次)から、ドームふじ基地で採取された深層氷床コアを見学したいという連絡があった。早速、極地研究所の藤田秀二さんにお願ひし、見学が実現した。参加した方々は、高尾さんの他、

磯貝重信(1~3次)、吉野正明(3~6次)、島崎里司(4~6次)、内山長徳(5、6次)、宮本武昌(5、6次)、島崎満雄(5、6次)さんであった。出発当時は平均年齢が27歳であったが、60年経ったこの日は平均84歳に変わった。低温室前室では上下羽毛服、防寒靴、帽子、手袋にゆっくりと着替え、ドーム氷床コアが保存されている-30℃の低温貯蔵室

に入った。しばしの間であったが氷床コアと説明に一同感動の声を上げた。それから、吐く息で見え隠れする－50℃の貯蔵庫にもほんの少し入ることができた。興奮も覚め止まぬうちに、今度は隊員室を訪れ、出発前の第



氷床コアと説明を聞く「宗谷」乗組員

58次隊員と交流した。予約なしの対面であったが、結構、隊員から質問も出て、楽しいひと時であった。最後に、南極・北極科学館を見学して満足げでお帰りになった。

(神田啓史)



重装備に着替えた「宗谷」七人衆

南極倶楽部「山の会」筑波山紀行

2018年5月30日、標記の山行が「雨」という天気予報にかかわらず決行された。参加者は会長の鈴木かおりさん、神田啓史さん、野元堀隆さん、阿保敏広さん、そして地元の安仁屋政武である。予定していた久保崇さん夫妻は当日体調不良で急遽参加中止。

5月12日に開かれた南極観測29次隊30周年記念の折、神田さんが私に「南極倶楽部に山の会が発足して1回目として奥多摩の御嶽へ行った。そしてこの次、筑波山を考えているが、参加できるか」と聞いた。日程が合えば喜んで、と答えて別れた。その後具体的な日程の提示があり、私がOKした後、予定コースを示して豚汁を作れるような場所があるか、と聞いてきた。それで、そのような場所（四阿）はあると返答し、一部コースを変更した案を提示した。前日の予報では昼から雨であったが雨天決行で計画は進んだ。

9時頃からつくばセンターのバス乗り場に



昼食は豚汁、ラーメン、霧筑波など



つつじヶ丘ロープウェー乗り場から女体山へ

集まり始めた。空はどんよりと曇っている。予期せぬことに増田博（9次）さんが差し入れを持ってバス停に現れた。一緒に行こうと盛んに誘ったが、次の日人間ドックがあるから、ということで固辞。阿保さんは、つくばでの開催だからということで、なんと年休を取って参加のこと。松原廣司さんは昼間用事があるので夕方の懇親会から参加ということであった。9:30の筑波山シャトルバスに乗り、終点のつつじヶ丘へ10:20頃到着。

行きのバスでは筑波山の上の方は雲の中であったが、つつじヶ丘に着いたときは女体山頂上が見えた。ロープウェーに乗り、女体山頂上には11時過ぎに着いた。天気予報が雨だったせいか空いている。男体山頂上は雲の中だったが、霞ヶ浦・土浦方面は結構見えた。

御幸ヶ原へはセキレイ茶屋下から横瀬雨情の歌碑がある脇道経由で行った。観光客は少ない。外れにある樹齢 800 年と言われる紫峰杉とその脇の男女ノ川の源流を見る。ここに行く途中に見事なブナがある。

御幸ヶ原から自然研究路に時計回りの方向に入った。すぐに間宮林蔵が樺太測量探検に出る前に訪れたという立身石にぶつかる。自然研究路は 1986 年のつくば科学万国博覧会の時に整備したもので、道沿いには地形・地質、植物、動物、地衣類、四季の花などの説明板がある。4~5 年前に崩れた崩壊地が自然研究路の周回を妨げているので崩壊地の脇を登り（この道は昔からある）男体山頂上へ行く道に合流する。ここからは岩の道だ。男体山頂上からは 数キロ先まで見える。雨を覚悟しているが降らない。むしろ明るくなった。ここには気象庁の旧測候所の建物があり、現在は筑波大学が測器を置いてデータを取得している。ここから自然研究路に降りて四阿へ 12 時半頃着いた。

ベンチの一つをテーブルにして野元堀さんが用意した豚汁、ラーメンを作った。かおりさんは手製のおにぎりを、阿保さんは「霧筑波」のにごり酒を持ってきた。野元さんはビール・日本酒も持ってきていた。旨い酒と料理で満足だ。デザートに増田さんの差し入

れ（みたらし団子と栄養ドリンク）を出す。2 時近くまで堪能した。自然研究路がある斜面は結構急なので慎重に歩く。チベット仏教の影響がある“重ね石”を経由して御幸ヶ原に戻り、3 時のケーブルカーで下る。



つくば市内での反省会風景

筑波山神社を経由してバス停へ行く。バスの時間を松原さんに連絡する。つくばセンターのバス停には松原さんが待ち構えていた。時間は早いが居酒屋「笑笑」に入る。阿保さんは、研修に来ている気象庁の南極観測 60 次の隊員候補の懇親会に参加するため 6 時半頃席を立ったが、残りの者は 7 時半頃まで楽しんだ。出たとき小雨が降っていた。山では雨を覚悟していたが降らなかった。皆の日頃の行いがよっぽど良かったのだろうか。とても楽しい一日であった。

(29 次、茨城支部長 安仁屋政武)

南極OB会アマチュア無線クラブ ハムフェア 2018 に参加

昨年に引き続き、日本で最大のアマチュア無線関連のイベント「アマチュア無線フェスティバル ハムフェア 2018」に参加、クラブブース（お店）を構え、アマチュア無線を通して南極観測を広くアピールすると共に、南極OB会で企画・商品化した記念品や南極関

連書籍等の販売をしました。

2018 年 8 月 25 日（土）・26 日（日）の 2 日間、東京ビッグサイト西展示棟 2 ホールで開催され、台風の影響が心配されましたが、真夏の青空の元、のべ約 39,000 名のアマチュア無線愛好者で賑わいました。



参加者の皆さん



展示ブースの様子

ブースには、極地研から借用した写真パネルや装備、南極の石や氷を展示し、来場者の興味を誘いました。元南極観測隊員や現役(今年出発予定)の南極観測隊員と直接話す機会は珍しいらしく、多くの質問や記念撮影の要求などでブースは終始賑わいました。

また、今年は初代南極観測船「宗谷」が竣工(1938年)してから80年となることから、

「宗谷」を維持・管理する(公財)日本海事科学振興財団「船の科学館」の協力をいただき、南極観測当初の貴重な写真パネルの展示やパンフレットの頒布を行いました。

年配の来場者の中には1次隊出航当時の様子をよく覚えている方や、初期の昭和基地のアマチュア無線局と交信経験のある方などから興味のある話を聞かせていただくこともできました。また南極観測隊OBや関係者の来訪もあり、久しぶりの再会で話が弾む等、南極サロンのような役割も果たすことができました。

南極観測とアマチュア無線の関わりは深く、

1次隊では作間隊員(通信担当)により、初めて昭和基地と日本がアマチュア無線による交信が成功して以来現在に至るまで、ほぼ継続して電波が出されて、日本はもとより世界中のアマチュア無線愛好者からの人気を集めています。現在では有資格による趣味に留まらず、南極観測事業のアウトリーチ活動のひとつを担うものとして期待されています。

南極OB会アマチュア無線クラブでは、「宗谷」竣工80年を記念してアマチュア無線の特別局を開設し、11月3日(土)・4日及び10日(土)・11日(日)に「宗谷」船上から全国に向け電波を出す計画です。

※ 南極OB会アマチュア無線クラブでは、常時クラブ員を募集しています。

アマチュア無線を通しての南極観測のアウトリーチ活動に興味のある方のご連絡をお待ちしております。

(25、46次通信 小林正幸)

南極関連情報

第60次隊員決定

平成30年6月22日(金曜日)に開催された第152回南極地域観測統合推進本部総会において、第60次南極地域観測隊員等64名が決定した。

なお、既に決定済みの堤隊長、原田副隊長を加え、第60次南極地域観測隊は総勢71名(夏隊40名、越冬隊31名)で編成される。また、夏隊同行者は最大33名で編成予定である。

砕氷艦「しらせ」が苫小牧入港 おにぎり作りや入浴、給水支援

北海道で最大震度7を観測した地震を受け、海

上自衛隊の砕氷艦(南極観測船)「しらせ」(艦長・宮崎好司1佐)が6日、苫小牧港に入港し、被災者支援活動を始めた。「しらせ」は親善のため7日に苫小牧に入港する予定だったが、地震発生を受けて1日早めた。一般公開などの行事は全て中止された。6日は乗組員が艦内でおにぎり千個を作り、被害が大きい安平(あびら)町とむかわ町に陸上自衛隊のトラックで運んだ。7日も500個作った。

艦内の入浴施設の提供や給水、携帯電話の充電サービスのほか、医官が医療相談に応じた。

(北海道新聞 HP などより)

連載「帰国後の各隊の動き」

10次隊晴海立ち50周年記念 名古屋総会

10次隊は、1968年11月30日に晴海埠頭を立った。それからちょうど半世紀。越冬隊では、出発時に20才台だった隊員が過半数を占めていたが、一番若かった当時25才の隊員も、

今年で後期高齢者になる。最年長の楠隊長はお元気で、来年には数え年の白寿を迎えられる。この間、越冬隊29人のうち6人の方々が、また夏隊13人のうち元極地研の村越さん・佐

野さんら4人の方々が亡くなられた。

10次隊の帰国後、首都圏に住む隊員の夫人たちの集いはあったが、1992年に家族を含めた隊員たちの総会が始まった。はじめは1年おきだったが、2007年からは毎年のペースで開催されてきた。企画・実施は、すぐに集合できる首都圏在住の幹事団(幹事長:木村征男 NHK特派員)が、開催地の地元世話人の協力を得て進めている。

50周年記念の会は、晴海を立った「ふじ」との再会を果たすため、名古屋で5月の開催となった。宿泊は恒例の温泉地ではないので、代りに名古屋城が間近に見えるKKRホテル名古屋とし、宿泊室・催事会場が全て城に面するよう、開催の1年前に確保した。

最近3回の総会参加者は、夫婦14組、単身8~10人と、人数面では極めて安定している。今回も、直前の不調による欠席があったが、闘病のなか体調を整えての参加などで、例年と同様、夫婦14組、単身8人が集った。5月15日のことで、翌日も最高気温が30℃を越える真夏日になった。

フロント・ロビーでは隊の受付を設け、幹事団の婦人たちが、手際よく集金し資料を渡して案内する。ここで、50周年を記念して作成された10次隊特製DVDが配られた。これは海上自衛隊による当時の映像と、NHKで全国放映された木村カメラマンによる越冬記録を編集した、90分のドキュメントである。

会は隊員による恒例の講演で始まる。今回は夏隊同行・横川和夫記者の「南極観測隊と共同通信社」。話題は、シャクルトン隊の生還劇や外国基地訪問のトピックスにもおよび、ご婦人たちにも好評だった。

18時から4階「名城観」の間で、宴会に移る。近況スピーチは全隊員に回された。年相応の話題やエピソード・珍談など、それぞれが共感や感嘆をよび、また爆笑が重ねられていっ



「ふじ」を背に10次隊一族。最後列左端に楠隊長 (小元隊員撮影)

た。窓の外では、木々の緑に囲まれた天守閣が夕景に映え、やがて青白くライトアップされて夜空に浮かんでいた。

20時半、中締めのもと2次会に移る。宿泊する10畳余りの和室に30人程が膝を詰め合わせ、持ち寄った酒やつまみを楽しみながら、遅くまで話し込んだ。

翌朝、貸切バスで名古屋港へ向かう。再会した「ふじ」をバックに記念撮影。のち自由に船内を再訪する。入口で渡された乗船証明書の番号は829万台。オープン以来33年(週1休)で、1日平均約800人の乗船となる。2年前に筆者が訪ねてからの計算でも、見学者は1日約560人と健闘している。

船内の廊下を巡り、ヘリ格納庫を改造した「南極の博物館」で昨春リニューアルされた展示を見る。飛行甲板に出て一休み。最後に外の急階段を登り、水族館・港湾施設を一望するブリッジに入る。そこでは、居合わせた船内清掃のおばさんに、感激した面持ちで迎えられた。「ふじに縁のある人たちに、こんなに次々と出会えて、今日は本当にうれしい」と喜んでいる。おかげで、わたしたちもうれしい気分になって、50周年の再訪を終えた。

(10次 上田 豊)

☆10次隊ホームページ:

<http://s10jare.dyndns.org/~s10/>

第 28 次南極地域観測隊同窓会報告

28 次隊は 1986 年晴海埠頭出港後 32 年、越冬隊帰国後に「28 次解散会」を行った、熱海温泉にて 6 月 9 日一泊の同窓会を計画した。13 時過ぎ、熱海駅に山内さんと第 24 次宙空隊員の牧野さんが昼食を一緒に過ごされ元気に現れた。その後、北海道から沖縄まで続々と集まり、宿のバスにて移動した。部屋に着いてから温泉に入浴し、ビールを飲みながら懇親を深めた。体調の優れない方々がだんだん増えてきた 28 次隊とを感じる今回の同窓会。18 時から夏隊・越冬隊含め 16 名にて宴会開始した。集合写真撮影後に宮岡さんが調達した南極氷と急遽参加出来なくなった、小山内さんが宅急便で送ってくれた日本酒、持参した泡盛他を飲みながら近況を話し合った。酒も進み、近況は程々にして、カラオケを始めた。高橋茂さんが進行役を買って出て「あすか基地」を思い出しながら茂さんが一曲を披露し、伊禮さん、平さん、宮下さん、向井さん、稲森さんと中西さん（725 コンビ）他でカラオケを満喫し、20 時過ぎ閉会となった。二次会は 20 畳程度の幹事部屋で石沢さんによるハーモニカ数曲の演奏を聴き、皆さんからは「昔からやっていたのか」とか質問が多数あった。二次会メインは稲森さんによる「28 次行動記



28 次同窓会。6 月 9 日熱海にて

録」の映像紹介。映像は越冬中に電離棟で皆さんが撮影したビデオをコピーし編集した物で、あすか基地の初越冬建設や 8 人の生活状況、昭和基地の作業や行動および誕生会等であった。幹事部屋のスクリーンに映された映像は、良く整理され、きれいで懐かしい面々と無我夢中で行った観測や楽しい行事を思い出した。また、若かりし頃の自分と南極を思いつつ深夜まで語り合った。翌日は朝食後、遠方からの人は早めに移動開始し、来年は 33 年目となるが、東京周辺で再会することを楽しみに熱海駅で解散した。

(28 次 馬場廣明)

29 次隊 30 周年記念祝賀会

20 周年記念事業開催後 10 年ぶりの開催に、観測隊・しらせ乗員とご家族も含めて遠くは北海道や鹿児島から合計 45 人が集まりました。当時中年だった者は初老に、初老だった者は後期高齢者となり、参加者の最高齢は前日に誕生日を迎え 79 歳になったばかりの渡邊隊長でした。

しらせ 5002 の隊員公室で物故者に黙祷を捧げた後、渡邊隊長の挨拶後、上垣副長（30 次艦長）による乾杯を行い、元乗組員の案内により 2 班に分かれて艦内ツアーを行いました。トイレなどは水洗化されているものの、ほとんど



「しらせ」に集合した皆さん

はそのままで当時の船内生活を懐かしく思い出していました。船内は一部の階段は少し緩やかになっていますが、急な階段の上り下りで参加者の中にはため息をついている人もありました。

記念集合写真撮影後、札幌ビール園に移動して限られた時間の中それぞれ近況や当時の思い出を語り合いながら特別料理を堪能しました。生涯独身を通すのかと思っていた人が最近結婚したという報告もありとても盛り上がった会になりました。そんな中、一番元気だったのは参加者最高齢の渡邊隊長ではなかったかと思います。

楽しい時間は短く感じるもので、バスで帰路につく人やもう少ししらせ 5002 を楽しみたい人などそれぞれの思いで、次回を開催を合言葉に解散しました。

なお、出港当時の観測隊と乗組員それぞれの集合写真、30 周年記念祝賀会の記念品の一部とした DVD（昭和・あすか・自衛隊撮影のビデオと昭和・あすか発行の新聞及びしらせで発行した南極新聞などを電子化して収録）及び祝賀会の寄せ書きを、お世話になったしらせ 5002 に寄贈しました。

（29 次 土井元久）

38 次観測隊 帰国 20 周年記念イベント

38 次隊は、平成 30 年 7 月 7 日に沖縄県那覇市の県庁近くの居酒屋「あばらぎ」で、帰国 20 周年記念の同窓会を開催しました。

私たちは、帰国後 5 年ごとに隊全体での同窓会を開催しており、平成 15 年 8 月の 5 周年（於：山梨県勝沼「ぶどうの丘」）、平成 20 年 8 月の 10 周年（於：長野県富士見「板橋区青少年センター」）、平成 25 年 8 月の 15 周年（於：北海道小樽の「青塚食堂」（食堂兼民宿））、不定期開催の平成 27 年 4 月の山内隊長・山岸夏隊長退職祝い、平成 27 年 9 月のしらせ研修会、平成 29 年 11 月の木津越冬隊長・平沢隊員（59 次隊）南極壮行会と続いてきた中で、7 回目の同窓会を開催しました。なお 38 次隊では、毎年 9 月に東京都多摩地区あきる野（秋川渓谷）での懇親バーベキューも、帰国後の恒例行事として行っています。

今回は、帰国後同窓会に未参加であった石



昭和越冬の 38 次の仲間が TV 電話で宴会に参加

垣隊員（通信）が在住する那覇市に、私（気象）が単身赴任となったことから、江崎、石垣の 2 名が幹事となり、今回のイベントを企画しました。同窓会参加者は、計 19 名＋隊員妻 1 名（北海道から沖縄県まで）となり、全イベント事故等無く、盛況の内に終了することができました。

イベントは、前夜祭（7/6）、シュノーケリングツアー（7/7）、同窓会（7/7）、沖縄本島内観光（7/8）、後夜祭（7/8）と盛り沢山の企画で構成され、前夜祭（5 名参加）では、国際通り（公設市場）観光、沖縄の「千ペロワールド」体験、昭和の香りがするディープな栄町市場で重く（翌日の懇親会に 2 名ほど影響あり）飲食して解散しました。シュノーケリングツアー（4 名参加）では、石垣隊員の漁船でチービシ環礁の北側（那覇市の北東約 10km）でシュノーケリングをして、透明度の高い海で美しいサンゴや



38 次隊帰国 20 周年イベント集合写真

魚を堪能しました（石垣隊員（帰国後漁協加盟）による夜光貝やサザエなどの漁獲あり）。メインの懇親会（20名参加）では、サプライズゲストとして、38次隊の仲間である昭和基地で越冬中の木津越冬隊長と平沢隊員（研究観測）に Skype の TV 電話で参加してもらいました。20年振りの再会やお互いの近況を語り合うなど大いに盛り上がりました。沖縄本島内観光（8名参加）では、首里城や斎場御嶽の世界遺産見学、平和記念公園、ひめゆりの塔や轟の壕での沖縄戦の学習、知念岬、喜屋武岬や糸数城跡などの海や史跡見学等を行い、昼食には「もずくそば」をおいしくいただきました。後夜祭（8名参加）では、観光参

加の全員でレンタカー返却後に軽く食事にと行きましたが、アルコールが入ると、前日散々話したはずなのに話題が切れることなく、またもや盛り上がりました。イベント終了後に参加した隊員から「20年!! 振りでも、全く違和感ない。38次隊は不思議な集まり」という感想がメーリングリストで送られてきましたが、私も全く同感で、得がたい不思議な集まりだなあと思いました。

イベントはそれぞれが楽しく密度も濃くて、あっという間に終わりました。次回の 25 周年（2023 年）は、京都(?) で開催される予定ですが、今から楽しみです。

（38 次 江崎雄治）

新刊紹介

ゴールは結婚 ―イタリア―南極一万三千キロの恋―

石川輝海、石川愛子

（桜山社 2018 年 7 月発行、1,500 円＋税）

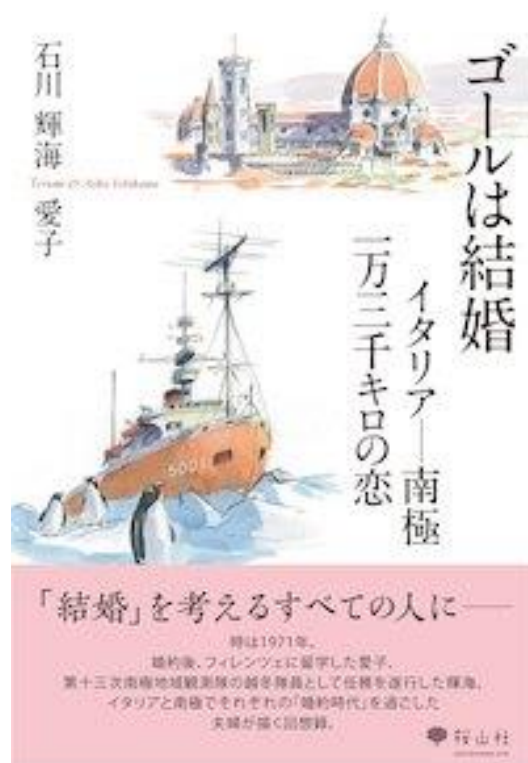
（ISBN978-4-908957-05-5 C0095）

南極観測事業においては、南極で観測に携わる者が脚光を浴びることがあっても、残された家族や応援者達にスポットが当たることとはめったにない。しかし、この事業は、少なくとも、一年数か月に亘って南極に行った観測者や船の者達を支えてくれる家族や友人、他のサポートがあってこそ成り立っている。

南極観測事業も六十年の還暦を迎え円熟期を迎えていると言えるだろう。南極に行く観測者が、科学的追及を行うことは当たり前のことだが、遠く離れて留守を預かる人たちにも喜びはもとより、不安や信頼、苦悩や葛藤などがあって、その両者をまとめて、南極観測事業の文化と言えるものができ上っていると思うのだ。

この書は、第 13 次隊の地質学担当で越冬した石川輝海氏と、そのフィアンセ・愛子氏のイタリアでの音楽修行と人々との交流やフィレンツェでの結婚、結婚以後のイタリアでのさらなる親睦が軸になっている。

第一は、「フィレンツェ青春第一楽章」、輝海氏と愛子氏の出合いから愛子氏のイタリアで生活、第二は、愛子氏がイタリアで音楽の勉強していた間、愛子氏を思いつつ南極で観測にいそしんでいた石川氏の「第十三次隊の南極記」、そして第三は結婚後イタリアで再び見聞を広げられた「フィレンツ



ェ青春第二楽章」から成っている。婚約を契った安心感からか、共に無邪気に青春を楽しんでいる。生きていればいろいろなしがらみに振り回される事が多いのだが、舞台がイタリアや南極のためだろうか、両者とも青春のあこがれに邁進する気概の生活で、すっきりした読後感がある。

この書は、南極における単なる観測者の視点で書かれたものではなく、観測者と留守家族との繋がり、パートナーとして信頼、そして何より互いを慈しむ気持ちの上に書かれていて、南極観測事業の文化的一助となっている。

（福谷 博）



訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

(敬称略)

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
根本 信孝	14w	調理	H30.5	69	藤本 繁雄	海上自衛隊 S46 以前		H27	不明
後藤 文夫	宗谷 3,4,5,6,次		H22.8	78	坂本 嘉夫	20s(obs)	報道	H30.7	76
小田 勝之	18s,19s	海洋化学	H29.12	74	松浦 光利	08 次ふじ	艦長	H30.8	98

南極 OB 会オリジナルカレンダー 2019 年版 販売します！

好評を博しております見開き A3 サイズ（日付部分と写真はそれぞれ A4 相当）のオリジナルカレンダーも、5 作目になります。2019 年版は応募作品と昭和基地沿岸域の写真から構成されています。過去、毎年完売という人気です。申し込み方法等の詳細は同封の「案内」をご覧ください。



(オリジナルカレンダー制作チーム一同)

オリジナルカレンダーの表表紙と裏表紙

また、南極 OB 会名入りカレンダーも同封申し込み用紙にて例年通り注文を受け付けます。カレンダー本体、送料等が値上がりしていますが、よろしくお願いします。

南極 OB 会 第 60 次日本南極地域観測隊壮行会のご案内（同封案内状参照）

1. 日時： 2018 年 11 月 6 日（火） 受付 18:00 より
2. 場所： レストラン「アラスカ」パレスサイド店
千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F 電話：03-3216-2797
3. 内容： 講演、第 60 次南極観測隊壮行会
4. 会費： ￥7,000 円（59 次隊員、同行者等、しらせ乗員は￥2,000 円）
5. 申込方法： はがき、電話、FAX、メール。いずれでも結構です。
（10 月 31 日締め切り、但し当日申し込み・参加も可能ですが、事前に参加の旨連絡いただくと事務処理上大変助かります。）
6. 申込場所： 南極 OB 会事務局（担当 長谷川慶子 水、金の午後在室）

南極 OB 会アーカイブ事業報告

60 周年を迎えた第 9 次隊のアーカイブ資料の紹介（その 1）

第 9 次隊の昭和基地接岸から今年で 60 周年を迎えました。

皆様もご存じのとおり、第 9 次隊は、村山雅美隊長の指揮のもと、雪上車による極点往復旅行という歴史的な快挙を成し遂げました。

南極 OB 会会報では今回から数回にわたり、第 9 次隊 OB の方々から寄贈いただいた貴重なアーカイブ資料についてご紹介させていただきたいと思ひます。

今回は、第 5 次、第 9 次隊越冬隊員として、また、極点旅行にも参加された川崎巖氏（機械・日本ドライケミカル）のご遺族から、今年 4 月に中段ボール 4 箱分のアーカイブ資料を寄贈いただきましたので、紹介させていただきます。

写真類（スライド、ネガフィルム、アルバム等）、録音テープ（オープンリール）、日記、フィールドノート、寄せ書き、記念切手、書籍などがあり、特にスライド、ネガフィルムが多く、

録音テープも含め今後デジタル化し、視聴できるようにしたいと考えています。(野元堀 隆)



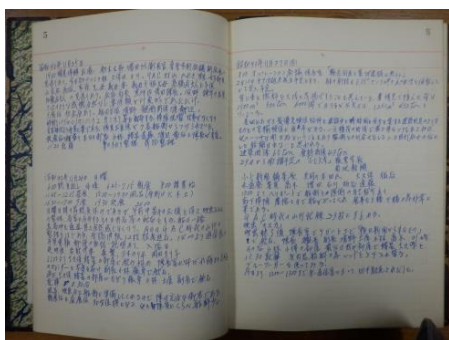
寄せ書き（全員ではない）



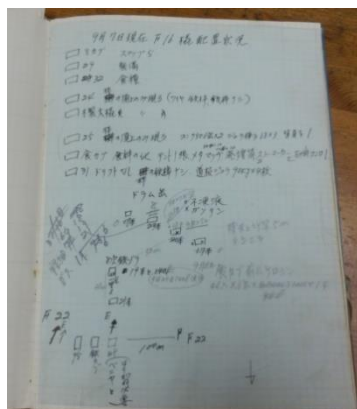
録音テープ



スライドフィルム



日記



極点旅行フィールドノート



写真・記念スタンプ

第9次隊 故 川崎 巖氏 より寄贈されたアーカイブ資料の一部

*** 【編集の終りに】 ***

○通信費納入のお願い

会報を皆さまにお届けします。今年度分を未納の方には念のため、通信費の振込用紙も同封しました。また、会員の皆さんから通信費納入状況についての問い合わせが多いため、過去（5年間）と今年度の通信費納入状況を封筒の宛名ラベルに記入しています。確認の上、通信費の納入をお願いします。

年度通信費は、3,000 円です。郵便振替の手数料は当方負担です。同封の振替用紙にて、窓口支払では130 円ですが、ATM（現金受払器）での支払では80 円と安くなります。振替手数料は当方負担のため、経費削減にご協力いただけますようお願いいたします。

○ 会員の皆様から

通信費払込みの際には、住所、電話、メールアドレス等の変更をご連絡いただき感謝しております。通信費払込用紙に記載されていた会員からのつぶやき（記載そのままです）。

（事務局 長谷川慶子まとめ）

・おん年 101 になりました。年なりに楽しくくらししています。

2 次夏、3 次夏 丸山八郎

1 次夏、2 次夏、3 次冬 村内必典

・7 人の孫の成長を見守りつつ楽しく生活しています。

・曾て三人で基地に迄行って居り乍ら米國艦長の一言で連れ戻された悔しさを忘れることが出来ずにおります。

海上自衛隊 43 次、44 次しらせ艦長
石角義成

・貴重な情報をいつも有難うございます。
9次冬、20次冬 山崎道夫
・現在対馬に単身赴任中です。今年もカレンダーよろしくをお願いします。

47次冬 増山英一
・昭和基地埋立WGの委員として環境美化に尽力するつもりです。

48次夏、50次夏 橋本 斉

・元気で宗谷ボランティアをしています。
宗谷5次、6次 内山長徳
・何とか消光しています。

5次冬 川尻轟大
・JARE29 30周年なつかしい顔との楽しい一時を計画されました。役員の皆様お疲れさまでした。

海上自衛隊 第12、27、28、29次機関科員
大橋重幸

○昭和基地からの情報追加



59次隊で建屋が完成した基本観測棟。旧管制棟に代わって気象棟の北側に建てられた。

ミッドウィンター祭には、第59次越冬隊から写真とともに昭和基地の現況が送られてきました。このうち基本観測棟について写真を掲載します。

極地研の情報によれば、基本観測棟は、気象棟・地学棟・電離層棟・環境科学棟を統合した観測系建物の更新第1号の建物で、地上2階建て、延床面積416㎡あり高床式で、12角形の外観が特徴的で屋上に観測デッキを設置して研究するスペースは1年を通しての温度約17℃±5℃を保ちます。放球する際にヘリウムを充填するための放球室は4200mmの天井高があります。オゾン観測室、気象観測室、放球室、地圏観測室、電離層室、生物・夏期研究室、機械室、工作室があり、2015年12月に基本観測棟部材が南極昭和基地に搬入され、2018年2月に建屋が完成した。

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

郵便振込 : 加入者名 南極OB会 00110-1-428672

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org>
